

ESSAY いたずら

倉元 信行

14

結婚相手

最初は同期入社の君だった。同じ理学部の化学科で机を並べていた彼は、入社時すでに婚約していて、同期の中で最初に結婚した。

私は結婚式に出るのも初めてだったのだが、博多で行われたこの式の披露宴の司会を頼まれ、その評判が良かったらしい。

それからはつぎつぎと話が持ち込まれた。私自身も司会が面白くて断らなかつた。そのころ、披露宴の進行は今のようにプロの司会者がやるのではなく、友人が引き受けるのが当たり前だった。

司会者は全体の進行の演出家でもある。無い知恵を絞って考案した出し物に使う小道具作りや、入退場などに使用する音楽の録音もする。当然、使用する音響機器などは、当日持ち込んでセットしなければならない。

会場によっては、部屋の飾り付けまでやることもある。

私は結局、二十数回の司会を積み重ねた。会社での記録かもしれない。

春と秋は大忙しだった。

私の前年に入社した庵んに司会を頼まれた時のことである。

彼と私は、寮の部屋でビールを飲みながら当日の出し物について打ち合せていた。突然私にひらめいたのは、突拍子もないアイデアであった。

新郎と司会者が入れ替わるのである。

当日、いよいよ出し物の時が来た。私たちは打ち合わせ通りすばやく交替した。

「では、新郎新婦への質問コーナーです」

もうほんのりと出来上がっている彼は用意された新郎への質問を開始した。

代わってひな壇に立った私は、みんなに一番うけるような答えをするのである。大爆笑であった。

この式が終わって会館の前で送りのタクシーの世話をしていると、会社の同じ研究グループに所属している先輩の庵んが、「ひとりもんは女の子を送っていけ」と、タクシーに無理やり私を押し込んだ。

この時、私が送られた新婦の友人が、2年後に私の結婚相手となったのである。

その時のことを思い出して妻は、送っていけと言われた時あなたは迷惑そうな顔をしていたわと言う。そして、この日私が新郎役までして大活躍したことについては全く覚えていないそうである。

私が結婚した昭和50年というのは寮生の結婚ラッシュの年だった。手帳をたどると、この年には合計8回の司会をやっている。

自分の結婚式の前日も私は君の司会をしていた。

寮で同じ階に住んでいた彼が司会を頼みに来た時、次の日は自分の結婚式なんだと打ち明けた。

彼は「ひよろ松」というあだ名の細い身をよじらせながら、独特のひょうきんな言い回しで「まーいいじゃない」と言った。

私も真似をして、「まーいいか」と応えた。

もしかしたら私は楽天家なのかもしれない。

